第４２回　ＭＡＳセミナー

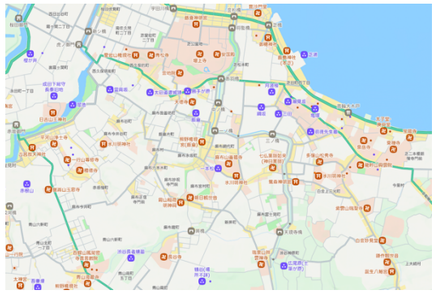
「開かれるお寺」

日時：2026/1/24(土)
14:00～16:00

首都圏の宗教施設の総面積は、都市公園の総面積を上回ると言われている。その中で多数を占めるお寺は、ここ港区にも多い。そしてそれらは地域に対して閉じていることが多い。その時代ごとの政権が檀家制度（寺請制度）によって家族を単位として民衆を束ねようとした結果、多くのお寺が檀家寺として閉鎖的に変容してきた結果ともいえる。しかし、過去において、お寺は寺子屋などの教育も担い、とみくじの勧進などで娯楽にも寄与し、境内は半ば公園のように機能していた時代があった。つまり広く大衆に開かれたコモンとして存在していたのだ。

いま、人口減少や家族観の変質により、檀家が減少するお寺は将来の在り方を模索している。その大きな方向性が「社会に開く」というものであろう。この流れは、都市にとっても大きな可能性を秘めているのではないだろうか。お寺が社会に開くとき、そこに現れる可能性やアイデアについて語り合う場としたい。

テーマ設定　：小川 真樹
司会進行　：田口 知子



今の港区の範囲の江戸期の地図（左が北）
薄い赤で塗られた部分が社寺の敷地を示す

開くことの意味について

公園と同等以上の面積を持つ宗教空間が存在する、という見方が新鮮だ。日常からは縁遠く感じるお寺。宗教空間には「神聖な場所」という意味がつけられ、古い建物や自然が守られていることは貴重だ。伝統的な宗教空間は、現代社会の金融資本主義や競争社会の価値観へのカウンターになりうるか。人々の幸せやコミュニティの可能性を考える、という建築家の職能のなかで、深く考えさせられるテーマだ。

田口 知子

「死もイベント」に？

多くの寺が運営に苦慮しているのは知っている。
自分の話でも、鎌倉の墓が行きにくくなったので空けて青山に移し、そこを弟に継いでもらおうと思ったら、既に弟が買っている寺の「墓仕舞い」に高額を提案されて困っている。
生死も、墓に振り回されるこの頃、死ぬのも簡単ではない。今や、寺の活性化とは経済問題で、死を心から弔う場ではないのかも。それならそれで楽しい場になるか。
すでに今も、将来は、ますます「イベント会場」。死もイベントになる？

大倉 冨美雄

精神的な心の場／Meditation

お寺は、祈願する、祈る場として、人間にとって欠かすことができない精神的な場であろう。近代化の中で、神に願う、瞑想Meditationといった精神的な部分は、非効率との判断の中、優先順位が下がったのではなかろうか。しかしながら、人にとっていざというときに神に願う、瞑想するといった行為の場は必要であり、その手立ては設計の中で求められるのではないか。いくつかの事例をご紹介し、精神的な場、について考えてみたい。

連 健夫

書がつなぐ日本文化

下町の小寺で書道を始めた。10歳で住職と向き合い書のイロハを教えてもらった。そこには近くのガキどもが集まり、静寂とは裏腹の場であったが、いつも違う空気が存在していた。墨を擦ることで静かに心に向き合うことができた。書の作法は知らぬが、墨、筆、和紙で文字を書くという文化を日本人は1000年以上続けてきた。寺という空間はその大事な日本文化を体験できる空間。5年前に京都の古寺で写経を親しんだが、これも楽しかった。「書」でコモン再生はどうか。

宮田 多津夫

天国の階段

たぶん三歳頃の記憶。
母方の祖父が亡くなった後、高井戸の寺の墓地にいた。母は小路の先を指さしてあそこに天国の階段があるのよ、と言った。僕には見えなかった。
どうしても見たかった僕は、どうすれば見えるのかと何度も聞いた。少しおいて母は、目をつぶると見えるのよ、と言った。
幼い僕はますます混乱した。
今はもう、目をつぶると見えるものがある事がわかる。そういうものが見える場所を身近に持っているのは幸福だと思う。

黒木 正郎

夏の寺は僕の幼き日のコモンであった

夏の日のその場所は僕にとって別天地であった。今でもあの頃を思うとセミの声が静寂とした広大な墓地に広がり、天を仰げば、玉虫がその黄金色の羽を広げて大木の周りを回っている。
苔むした池には鯉や小さな海老、水澄が無数にいた。お寺は僕にとってその頃からすでにコモンスペースというよりプライベートなスペースとでも言えそうな親密な存在であった。ちなみに僕の幼稚園の名称は高野山幼稚園といった。

今井 均

都市にひらく、心の庭としてのお寺

お寺は、過去の檀家制度に縛られた閉じた場ではなく、都市にそっと呼吸を戻す「ひらかれた空（くう）」として再生できる。人が集い、学び、癒え、静けさに触れる共通の居場所である。家族構造が変わる今こそ、お寺は血縁を超えた「心の帰る場所」として機能できるのではないでしょうか。光・風・庭・建築・祈りが溶け合うコモンとして、都市の余白を育てていく存在へ。

大塚 泰子

コモンとしてのお寺

建築家が建築を社会に開こうとすると、必ず「管理上の問題」と対峙することになる。安易に閉じたくはないけれど、これが一筋縄ではいかない。そもそも、コモン（公共空間）とは誰かに与えられるものではなく、市民が自発的に守り育てるものであるはずだ。そのような意識を啓発・醸成することが建築にできないだろうか。よい答えは簡単には見つからないけれど、お寺にはそれができるアドバンテージ（歴史的記憶）があるように思う。

小川 真樹